
人形の涙

高坂翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形の涙

【Nコード】

N3294I

【作者名】

高坂翡翠

【あらすじ】

孤児院で酷い扱いを受けてきた少女ラルム。

ある日、隙をみてそこを抜け出した。

険しい道を森を通り、ようやくたどり着いた目的地。

そこは花の国フルール。

フルールに伝わる古いお話。森にいたエンズイー、ドール。

フルールにきた、エンズイーと出会った、ドールと出会えた。

その事実が、ラルムの全てを変える。

人物紹介

人物紹介

ラルム

涙を流し続けた少女。
孤児であり、酷い扱いをうけてきた。
隙をみて逃げ出し、フルールへやってきた。

ドール

フルールの森に棲む魔女と呼ばれている。
美しい容姿に、美しい歌をもっている。
生きる人形。
聖女のエンズイー。

増えます；

人物紹介（後書き）

まさかの自己紹介だけっていう悲しさ。
次からは真面目に。。

序章

この国には、魔女の棲む森と恐れられている森が存在する。魔女の棲む森、そこは、この世の何処よりも危険だともいわれるのだ。

そう謳われてきたそこには、言われのとうり魔女が棲んでいる。そう言われ始めたのは大分昔。あの出来事の後からであろう。

昔、そう言っても、ざっと1000年足らずだろう。

では1000年前、ここ、フルールで何が起こったか。

そもそも、フルールは別名、花の国と呼ばれるほど、華やかな国であった。

国民同士の仲もよく、王家の者たちも、国民を良く考えて物事を行っていた。

そんな理想の国。

そんな国の、おかしな噂が広まったのが、全ての始まりなのであるう。

”花の国の王が、逃走したらしい”

そう、他国で騒がれ始めたのが、150年前。

誰もが信じ難かったその噂は、瞬く間に広がった。

皆、嘘だろうと、世界を乱そうと考える輩の仕業だろうと考えたが、

フルールの王が逃走した事は、まぎれもない事実である。

他国の者が信じられない信じられないと騒ぐ中、フルールの王家の者たちは、その事実を受け入れた。

此処に王がいないことはまぎれもない事実。

しかし、なによりも、王家の者達しか知らない秘密があつたのだ。

フルールでは、王家の中で王になれるのは、ある一族だけと決まっていた。

そして、その一族とは、ブラウワール一族である。

その一族は、体にその証をもち、酷い運命が決まっているのである。証をもつ一族の人間は、その逃げ出したくもなる運命を抱えて生きていくのだ。

それを知る王家の人間は、全てを受け入れることしかできなかつたのだ。

そして、王になれるブラウワールの者は、既にいなかった。

王は、子孫を残さず、去っていったのだから。

まず、王の逃亡。

これを初めの災厄としよう。

それから幾月。

花の国とも呼ばれてきたフルールは、その面影すらなくなり始めていた。

国を支える王はいなくなり、そして、王になれる唯一の一族もいな

い。

これでは、いつしか国は滅んでしまっ

そう考えた王家の者たちは、考えた。

考えて考えて、ようやく、一人の者が意見をだした。

” エレズイーの聖女に頼もう ”

エレズイー。

それは、この世の者とは異なる者たちのことを言う。

簡単に、異端者である。

エレズイーを見ると死んでしまっ

そんな言い伝えがある程に、恐れられている者たちなのだ。

そして、反対に、

エレズイーは神に一番近い存在である。

と、捧まれる存在でもあるのだ。

エレズイーは、いくつかの分類にわかれている。

吸血鬼・悪魔・人魚・聖女・・・

それらすべてに、個々の特徴があり、棲む場所も違ってくる。

吸血鬼や悪魔は、治安の悪い所。

聖女や人魚は、美しい所。

それにあてはまる国の近くに、森をつくり、生息しているのだ。

その森は、どんなエレズイーの森でも、とても美しいとされている。

そして、それはその容姿にも言えることである。

どのエレズイーも、人間をはるかに超える美しさをもっている。

しかし、その森に行こうとするものも、姿を見ようとするとする者もいな

いのだ。

それは、古くからの言い伝えによるものだろう。

エンズイーを見れば死ぬ。

それが、人間の恐怖心を掻き立てるのだ。

” あんなとことに行けるのか？ ”

案の定、その意見は反対された。

しかし、なによりも国の事を考える発言者は、自分が行くといった。勿論、自分に害がないと判明したからには、止める理由はない。

” では、行ってくれるか？ ”

他の者の言葉に、満足げにうなずいた彼は、数日後、エレズイーの森へと国を出た。

そして、それから幾月。

戻ってこない男に、王家の者も半ばあきらめていた頃だ。

彼が国へ戻ったのだ。

どうだったかと聞けば、快く引き受けてくれた、と答えた。

では、何故こんなにも時間がかかったのかと聞けば、それは言うなと言われたと答えるのだ。

不思議には思ったが、彼も無事に帰ってきた、そして、国も救われる。

そう思うと、そんな事はどうでもよかった。

エンズイーは、国にあった森に棲むことになり、その森から一步もでてはこなかった。

しかし、エンズイーとはいえど、寿命は人間と同じ。

そこで、それまで森にいたエンズイーが死ぬと、違うエンズイーが来ることになった。

そのことは、国民にも伝わる。

国民は、恐れていたエンズイーが森にいることに、少しの不安を抱えた。

しかし、また昔のようになるならば。と、そんな事、気にしなかったのだ。

それから一年。

何事もなくその月日が流れ、国の治安も良くなってきた時だ。

一年前、エンズイーの森に行った男が、亡くなったのだ。

それも、外傷はなく、病気で亡くなったのに。

突然の変死。

それは、男だけでは終わらなかった。

次々に変死が続き、最初の変死からまた一年。

それはようやく収まった。

しかし、その傷跡は大きく、国民の大半が亡くなった。

そして、国民は、この大量の変死を、エンズイーの仕業だと噂した。噂というのは、本当に広がりやすいもので、また、たくさんの国にまで広がった。

それから、エンズイーは聖女にもかかわらず、魔女と呼ばれ、フルールの其の森は、魔女の棲む森として恐れられたのである。

そう呼ばれ始めたのが、100年前なのである。
それから100年。

現在のフルールは、治安もよく、もう一度、花の国と呼ばれた美しい国に戻ったのだ。
なにも変わりのない、美しい国。

魔女が棲むと呼ばれる、其の森さえなければ。

？

「今から皆で出かけてくるわ。
仕事、きちんとしておいてよねっ」

そう言い残して閉められた家の扉をみる。
ああ。今日以外に、こんな機会あるんだろうか。

「いや、ないよ」

ここを出よう。
こんな生活、もう耐えられない。

「涙も、枯れちゃうほど、長く此处にいたんだなあ……」

咳いて、何も持たずに家を出た。
勿論、行先は決まっていない。

行くあてもなしに、初めての長旅に出るのだ。

長く過ごしてきたこの孤児院に、礼を言うつもりはない。あんな扱

いを受けて尚、ここに”ありがとう”なんて言葉をかけてやるほど、彼女の心は広くないのだ。
むしろ……

「私の心、殺してくれてありがとう。」

礼をいうのなら、そんな皮肉じみた”ありがとう”だけだ。

一度、その大きな建物を見上げてから、歩き出した。

この国の名は、ビザール。

私の住んでいた所は、ビザールの端っこ。

国を出るのに、そう時間はかからなかった。

「さて、ここからどうするか。」

此処から先、続くのは広大な森だ。

森を超えれば、花の国、フルールにたどりつく。
しかしそこまでが大変だ。

どうやって、この森を超えようか。

「下手すれば、迷う。」

どうするべきか。

「とりあえず、進むか」

深く考えずに、頭に浮かんだ考えがこれ。
迷ったら迷ったで、仕方ない。

そう思いながら、道なき道を進んでゆく。

.....

広い森、そこにいるのは奇怪な者たちばかりだった。
今まで、国はもちろん家すらでたことのなかった私にとって、全て
のものが奇怪に見える。虫、鳥、動物。恐怖がある。しかし感動も
ある。

自分が解放された。それを実感することができた。ここにいる恐怖
よりも、ここに在る感動の方が大きかった。

「ハア、ハア」

どれほど大きな感動があっても、疲労は襲ってくる。

ただでさえ体力のない体。道なき道を歩くのは、きつかった。初めての旅。ちゃんと出られるだろうか、ここで息絶えてしまわないだろうか。そんな恐怖が、精神的にも追い込む。

今日は、ここで休むことを決めた。

「星が、綺麗。」

まるでつかめそうだ。そんなことを思いながら、空に手をのばしたが、その手は完全に伸びきる前にぱたりとおちた。

疲れた。非力な自分を責めたのは、何度めだろうか。力があれば、ここから抜け出せるかもしれない。力があれば、幸せになれるのかもしれない。今まで、何度そんな事を思ったか。わからない。

力のない非力な私。隙についてやっと抜け出した地獄。例えば非力でも、神様は味方してくれると思った。

こんなところで力のない自分を恨むことになるとは、思わなかった。甘かった。

たった一度の幸せに、気を抜いていた。

この眠りから覚めたら、私は死んでいるかもしれない。それでも生きていたなら、今度は地獄を覚悟して足を踏み出そう。

我ながら変な覚悟だ。

夢の中でそう思いながら、暗い闇に溶けた

？

朝。目を覚ます。

半開きの目に、光が差し込む。まぶしい光に、一瞬なにも見えなかった。

しばらくして見えたのは、昨日意識をなくした時の、そのままの景色。

死後の世界が見えるのでは。そんな事を考えていたから感動したのか、どうせなら死んでいればよかったと思っただけなのか、わからないが、私の口は弧を描いていた。

微笑んだのか、自分自身を嘲笑ったのか、良く解らない笑みを浮かべるために、綺麗な弧をかいていた。

「さて、行くか。」

起き上がり、誰に向かってでもなく、言葉を放つ。

今日はどこまでいけるだろう。

迷ってしまうのか、運がよくてフルールについてしまうか。いい方も悪い方も考えながら、険しいその道を歩いた。

.....

歩き出して数分。

いや、数時間かもしれない。時間感覚まで麻痺してきた。それでも、足が鉛のように重くなるまで歩き続けた。

足が痛い。そこまで歩いたんだ、数時間歩いたのだろうか。いや、私の体力は普通ではない。数分でそうなってしまいかもしれない。空っぽの頭が、ひたすらそんな事を考えた。喉が渴いた。とか。お腹がすいた。とか。

そういう叶えられない要求を、考えないように、空っぽにする。他の事を考える。それができないのなら、唾と一緒に飲みこんだ。

今は何月だっけ？ 嗚呼、12月だ、冬なんだ。あの鳥は何色をしている？ 嗚呼、綺麗な青だ。今は何時だろう？ 嗚呼、お腹が鳴った、お昼くらいだ。

自問自答をくりかえす。要求を遠ざけるように、質問しては答えて。でも、たまにそれがあだとなって、余計要求が大きくなる。

早く着かないか。そう思うと、なんだか虚しくなった。そんなに簡単につくわけがないのに、そう思ってしまう自分の心が。

歩いて、歩いて、歩いて、あるいて。夜、街の明かりが見えた時に飛び上るほど嬉しかった。もう動かない足を無理やり動かして、街にはいった。花の街、フルールに。

「やっと、ついた・・・」

夜。今何時かはわからないが、とにかく夜。昼のにぎわいは消えて、静まり返っている。花の国も、夜になればこんなに静かなのか。現実を一つ知った。

重い足を引きずって、近くの森へと向かう。

倒れそうだ。でもこんなところで倒れるわけにはいかない。

この容姿のせいで、殺されてしまうかもしれない。

だから、せめて目立たない森へ・・・。

足が痛い、すぐにでも倒れそうだ。それでもよういえく森へはいった。

入って、人目に付かないところまで行って、そこでようやく倒れた。

フルールにこれた。ここにきてやっと、希望の光が見えた気がした。

？
(後書き)

前回やっと本編に入れた私。
嬉しい。が、完結は程遠い・・・。
頑張ります。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3294i/>

人形の涙

2010年12月18日19時26分発行